

令和3年度

在宅緩和ケア研修 報告

* 日程

▶ ZOOMによる研修

令和3年7月24日(土)

9:30~12:00

▶ オンデマンド配信

令和3年8月10日(火)

~8月31日(火)

* 研修目的

「在宅緩和ケアの充実と多職種連携の深化」

医師と薬剤師と訪問看護師を中心とした医療連携を学び在宅緩和ケアの質の向上を目指し、また地域において「京安心ネット」を活用した多職種連携体制の構築を推進していくための機会とする。

第一部

テーマ「訪問診察と連携」

医療法人温心会 おがわ内科呼吸器内科医院

訪問診療部長 近藤 健 先生



癌性疼痛のケアは、痛みの正確な評価、不安の軽減、麻薬の適切な投与が重要。投与方法についても内服はシンプルにかつその人のリズムの合わせた内服方法とし、痛みをとることで自分のしたいことが出来るようになることが大切であると話されました。またどこで最期を過ごしたいかについても元気な時に普段の何気ない会話から話し合っておくことが重要で方針は変わってもいいということ。在宅でなければならないことはなく“宙ぶらりん”でいいとのお話でした。看護師に期待することとして、小さな変化に気づくこと、アドボゲーターとしての役割を果たす、先生への報告はSBAR(エスバー ※シンプル 効果的に報告)で報告することなど話されました。在宅は生活の場であり家族の存在は大きく、適切なコミュニケーションで本人、家族と一緒に考え、悩みながら最善の方法を模索していくことが大切と話され、改めて看護師としての役割を考えさせていただきました。



第二部

テーマ「疼痛緩和と薬剤師のトリセツ」

クルミ薬局 2号店

管理薬剤師 二村 直行 先生



クルミ薬局は京都市中京区にあり、無菌室の設置があり、在宅業務にも特化している薬局です。医療用麻薬の種類、特徴、具体的な使用時の注意点（オキノーム散は水に溶けやすいので嚥下機能が低下していても使いやすいことや口腔乾燥があると舌下、バツカル錠は吸収が悪くなるので、口を湿らせてから使用すること、ヒドロモルフェンは呼吸苦でも使用できること等など）を教えて下さり実践で役立つことと思います。そしてTPNや持続皮下注射の無菌調剤は在宅ならではの役割を果たし、職能薬剤師という疾患に特化した薬剤師の紹介もしていただきました。また、内服管理の方法として、薬カレンダーのみならず、薬をシートに貼りつける方法、ファイルにセットする方法等を写真で紹介していただき、このアイデアは非常に参考になるものでした。在宅緩和ケアの充実を図るには、鎮痛剤の知識・特徴を理解するとともに、電話、医療介護専用SNS「メディカルケアステーション（MCS）」等を活用しながら他職種で情報共有し、連携を深めていくことが重要であると再確認しました。



副会長あいさつ

京都府訪問看護ステーション協議会

副会長 鵜飼 真由美

近藤先生、二村先生、本日はお忙しい中貴重なお話有り難うございました。医療・薬剤師・訪問看護師を中心とした医療連携を学び在宅緩和ケアの質の向上、また地域における「京あんしんネット」を活用した多職種連携体制の構築推進につなげていきましょう。

在宅緩和ケア研修受講後アンケートより

参加者：ZOOM 100名

オンデマンド視聴 692回

【今回の研修で学んだこと まとめ】

・在宅での緩和ケアと癌治療は並走出来ること、疼痛アセスメントの大切さを理解することができた。在宅看取りは選択肢が一つ増えたというだけで医療者側の価値観を押し付けない事、人の死は自然なものである事を伝えていく大切さ、主治医への的確な報告の仕方を学んだ。S B A R（S：状況、B：背景、A：評価、R：提案）の理解もでき、ステーションに持ち帰り学びを深めたいと思った。薬剤師の先生の講義が日々業務に生かせる内容でわかりやすかった。医師、薬剤師との連携の仕方がわかり、疼痛緩和に

ついて、今後は是非薬剤師さんにも入っていただき相談していきたいと思った。

【在宅緩和ケアについてもっと知りたいこと、学びを深めたいこと まとめ】

- ・ 苦痛症状に対して看護師で出来るケアやコミュニケーションの方法やリラクゼーションの方法（マッサージやアロマオイルなど）、薬物以外の緩和手法。排便コントロール。
- ・ 不安や恐怖などへの精神的苦痛への対処方法（スピリチュアルペイン）
- ・ 在宅で看取る覚悟が出来ず悩まれている家族への対応、言葉かけについて。
- ・ デスカンファレンスの在り方やグリーフケアについて。在宅に特化されている医師の存在について。

【考察】

緩和ケアに必要な治療についての知識を得ながら、実際に使える技術や介入していくヒントを得たいと考えておられる方が多いことがわかった。技術や対応方法を得る機会や日頃の悩みを共有したり、困りごとを対応するためのヒントを得ることを研修の場に望まれていると考えられる。次回の研修では意思決定支援、緩和ケアの実際を知るために症例を通して情報共有ができる機会にし、訪問看護師同士の交流を行うことが有益な研修になるのではないだろうか。

【研修を終えて（研修委員 北仲委員）】

コロナ禍において研修のあり方の変化にまず対応するところから始まり今回の緩和ケア研修では、会場とオンライン、オンデマンドの研修と課題山積な中での研修となりました。

当日会場でお手伝い、対応させてもらいつつ、近藤先生と二村先生のお話をお聞きし訪問看護師に求められること、例えばその方の人生の伴奏者になること、また多職種連携の在り方、思い込みの無い報告の仕方について間近で先生の熱意のこもったお話を拝聴することができ感銘をうけました。それと共に、研修を開催する側、受講者側のそれぞれの立場から研修に関わることができて、私にとって大変学びの多い研修となりました。協議会の研修担当としては研修を通して受講される方々のニーズを拾い上げて次に活かすことができたらと感じ、一会員としては自分がどういうことを今知りたいと感じているのかを協議会の方に伝えていくことが必要だと思いました。

【広報委員会より】

コロナ禍にあり ZOOM,オンデマンド研修の開催となりましたがたくさんの方が参加でき、良かったと思います。近藤先生、二村先生の講演を聞かせていただき、在宅看取りにかかわる看護師としての姿勢や役割、多職種での情報共有の重要性について改めて理解を深めることが出来、大変有意義な研修となりました。研修開催にあたり調整等に関わられた皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。